

陶彩画『かぎ猫展』

矢山昭子と幸運を招く かぎしっぽの猫達

2012/04/17(火) - 04/30(月・祝) 4.23(月)は定休日

11:30~18:00 最終日は 17:00 まで



陶彩画は、従来の絵画技法にはない多くの特長と可能性を秘めた新しい表現です。

ただ、高度な絵付けの知識と技術はもちろん設備投資、焼成を重ねる際の様々なリスクなどがあり、決して簡単な技法ではありません。

しかしそうして完成する陶彩画の高温で焼成して定着した画面は、紫外線や湿気に完璧と言っていい耐性を備えます。

油絵さえ 100 年経つうちには劣化を免れない絵画の世界において、半永久的にその輝きを失わない陶彩画はどれほどの可能性を秘めているのでしょうか。

技法の成立は 20 年前、作家はようやく2人目。陶彩画はまだ歩きだしたばかりです。

矢山昭子

陶彩画とは、従来の有田焼の手法を用いながら、独自の発想と工法で完成した焼き物の絵画です。

それは草場一壽の 20 数年にわたる研究の成果として、高い評価を頂くまでに至りました。

陶彩画は、白い陶板に釉薬で絵付けを重ねて描きます。

一度絵付けをしては焼成し、さらに上から違う色で絵付けをしては焼成し、十数回にも及ぶ窯入れを繰り返しながら、絵を描いていくのです。

色合いや図柄に合わせた緻密な絵付け作業は、正確さと根気強さを必要とするだけでなく、窯の温度調整から時間配分まで、制作過程は一切、気を抜くことのできない緊張のときです。

そして、窯に入れたあとは「火に託す」という人間の思惑の届かない世界。

そうして出来上がったものは、ときとして作者のイメージをはるかに凌駕して、まばゆいばかりの光を放ちます。

仕上がりの偶発性のある程度考慮しつつも、窯の中で溶け合う釉薬が生み出す色彩はまさに奇跡。

同じ色が生まれることは二度とありません。

かぎ猫とは

猫の尾のすらりと長いのも美しいですが、曲がった尾も愛嬌のあるもの。

長崎ではそういった尾はかぎしっぽと呼ばれ「幸運をひっかけてくる」と言われています。

かぎ、とはフックの「鉤」でもあります。本来は昔の蔵の鍵の形をそのまましめしての「鍵」しっぽでした。

そういった古い鍵はあまり見かけなくなりましたが、縁起紋や家紋、お稲荷さんがくわえる鍵などに、稲をはじめ多くの宝物を納めた倉庫の鍵として、今でも豊穡を祈り守る意味を残しています。

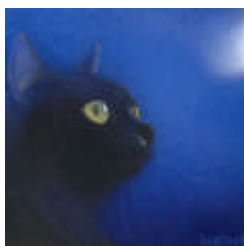
そんな鍵にもなぞらえられる尻尾の猫達は、かわいくもありがたい存在なのです。

他にも珍しいオスの三毛猫や、金目銀目といわれるオッドアイ、黒猫白猫なども幸運のジンクスを伝えられています。

そして、何の変哲もなくとも他のどんな猫より愛しいあなたの猫も、その子だけの表情であなたの気持ちを和ませ、幸運をよぶきっかけをつくるマスコットであることでしょう。

その幸運の猫たちを「かぎ猫」というタイトルにして、世界にひとつの陶彩画でつくりました。

願わくば、猫達があなたに幸運をはこびますように。



陶彩画とは



個展情報

陶彩画作家 矢山 昭子

昭和 58 年 佐賀県生まれ

平成 13 年 佐賀県立佐賀北高校 芸術コース 卒業

平成 18 年 武蔵野美術大学造形学部 油絵学科 卒業

平成 18 年 草場一壽に師事

平成 22 年 世界で二人目の陶彩画家としてデビュー

現在も今心工房に所属、陶彩画のデザインとかぎ猫作品の制作を手がける。